

説 教

棕櫚の日曜日

北浜チャーチ

2022年4月10日(日)

黒田 禎一郎

主 題：「わたしの家は祈りの家です」

—イエスの心—

テキスト：ルカによる福音書19章41～48節

はじめに

- ・今日からキリスト教カレンダーでは、「受難週」が始まります。そして今日は、「棕櫚の日曜日」(Palm Sunday)と呼ばれる記念すべき日です。イエス・キリストはガリラヤ地方で「神の国」のわざを終えられ、エルサレムに來られました。その目的は、カルバリ丘で十字架におかかりになるためでした。
- ・群衆は、そのようなイエスの心中を知ることもなく、棕櫚の小枝を手にし「ホザナ。ホザナ。」(Save Us Now)、「私たちをお救いください」、と歓迎し叫び声を上げました。エルサレムの群衆は、イスラエルの人々をローマ軍から解放してくれる政治的メシアとして期待して迎えました。
- ・イエスの生涯で最も密度の高い一週間、受難週を迎えました。もしイエスの受難週がなければ、その後の十字架、埋葬、復活、そして救いのみわざの完了という「神のマスタープラン」は成就しませんでした。イエスはただ従順に、いばらの道を歩み始められました。
- ・今日は、その受難週から2つのことを取り上げます。

大切なポイント

1. エルサレムのために泣かれたイエス

19:41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。

19:42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。

1) 平和の都エルサレム

- ・イエスは、エルサレム都の東側にあるオリーブ山から、都に向かわれました。その道は下に向かう坂(スロープ)で、その下にケデロンの谷があります。ここまで大人の足で約10分から15分でしょう。そのケデロンの谷をとおり、今度は都に向かって上り坂となり、エルサレムの都に入ります。ケデロンの谷のすぐ横には、「ゲッセマネの園」があります。

- このみことばはイエスがその下り坂の途中で、都をご覧になられ、そしてエルサレムの都のために涙を流して言われました。 ルカ 19 章
19:42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。
- この場所は、エルサレムの都を真正面にして、東側から全貌を見ることが出来る場所です。 (写真：主の涙の教会から見た都)
現在、その場所には、カトリック教会のチャペルが建てられ心静めて祈ることが出来ます。
- イエスが涙を流されたのは、エルサレムが「平和に向かう道」を知らなかったからです。「平和に向かう道」とは、イエスを通して成し遂げられる「救い」を意味します。

2) 平和を失ったエルサレム

- エルサレムという名には、「平和」(shalom: シャローム) という意味が込められています。しかし平和の都エルサレムは、「平和の君」である神の御子イエス・キリストを受け入れませんでした。そればかりか、エルサレムはイエスを拒み、十字架にかけて殺し、結果的に滅びることになりました。
- イエスは、エルサレムの崩壊を預言し言われました。
19:43 やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して墨を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、
19:44 そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」
- 実際、紀元 70 年ローマの将軍ティトゥスがエルサレムを破壊し、人々を虐殺しました。平和の君であるイエスを拒んだ結果は、石ひとつも他の石の上に残らない徹底的な滅びでした。
- エルサレムの崩壊によって、イスラエル人たちは国を失い世界各地に離散することになりました。それが「ディアスポラ」(Diaspora) , と呼ばれるものです。「ディアスポラ」(離散) ユダヤ人たちは、神殿を失い、国を失い、世界を流浪する民となってしまいました。
- そして再びイスラエル国が建てられた 1948 年まで続きました。ユダヤ人たちは 1878 年間にわたり、「流浪の民」となりました。それが御存知のように、ユダヤ人の悲劇の歴史でした。
- それは「平和の道」を知らなかったからです。その結果は非常に大きなものとなりました。神によって選ばれた民が、神が示された「平和の道」を拒んでし

まった結果であります。

- 私はよく次のみことばを思い浮かべます。ガラテヤ人への手紙 6 章
6:7 思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。
人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。
神は真実なお方です。神がお持ちの原則はシンプルです。しかし、シンプルな原則さえ守られなかったのがイスラエルでした。平和の君であるお方の前に生きる姿勢が問われます。
- しかし。それでも愛の神はイエスを拒み、十字架にかけた民を、もう一度約束の地に連れ戻すと預言されていました。エゼキエル書 3 6 章
36:24 わたしはあなたがたを諸国の間から導き出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。

イスラエルの国の再建、それはただ神の愛です。

- 皆さん。私たちは、このことから何を学ぶでしょうか。
少し立ち止まり考えてみると、私は次の点を教えられました。
 - ① 歴史は神の手の中にある
 - ② イエス・キリストは世界の中心である
 - ③ 人は歴史の中に生きる存在である
- 話を戻します。私たちはイエスの心中を考えてみましょう。
イエスはどれほど心を痛めておられたかです。彼らは、聖書の神を幼い頃から聞き、知らされた民でした。異邦人とは違いました。モーセの律法の中で歩んだ民でした。しかし、「平和への道」が分からず、平和の君を拒みました。
19:42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。
- 隠されるということの背後には、心が頑なで、神に敵対した姿勢がありました。みことばを受け入れるには、信仰が必要です。信仰とは、聖書に記してある「神のみことば」（旧約聖書）を受け入れることです。彼らはメシアについて書かれた聖句を、信仰で受け入れるべきでした。
- しかし、みことばを知っていた専門家、また深く学んだ律法学者は、イエスをキリスト（救い主）として迎えませんでした。なぜ、でしょうか・・・？
彼らの目が隠されていたからです。イエスは「平和の道」を拒んでしまいました。イエスはそのエルサレムをご覧になり、涙を流されました。

3) 平和への道

- ところで、イエス・キリストは、実にこの受難を受けるために世に来られました。ご自分の来世目的をはっきりと自覚しておられました。ですから、心の痛みはどれほど大きなものであったか、それは私たちの想像をはるかに超えるものです。
- エルサレムは「平和へ向かう道」を知りませんでした。イエスを受け入れませんでした。現在も多くの人々は、「平和への道」を知りません。民族は民族に敵対し、世界は「平和への道」を知りません。
- 平和を叫びますが、「平和への道」には至らないのです。彼らは平和を得るために戦いを始め、それを繰り返し替えています。それが人類の歴史です。なんとという愚かな人間の姿ではありませんか。

- では、なぜ、人間はこのようでしょうか？

➡ 最大の問題は、人は罪人であるからです。

どれだけ立派な人でも、そしてどこまで進んでも、本当の「平和」(シャローム)には至りません。神が備えてくださる「平和の道」に進まない限り、どれだけ努力しても平和をつくり出すことはできません。

- ただ「平和の君」であるお方、イエス・キリストによってのみ実現されます。

イザヤ書 9 章

9:6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

預言者イザヤは、このようにやがて来られるメシア(救い主)を預言しました。

- しかし、エルサレムは「平和の君」を拒みました。それは、私たちのかつての姿ではないでしょうか？ イエスはエルサレムを前にし、涙を流されました。涙には、悲しみの涙、同情の涙、痛みの涙があります。ここにイエスも人としての姿を見ます。
- イエスはこのような痛みを持って、エルサレムの都に入られました。それが次のポイントです。

2. 神殿に入られたイエス

1) 悪の巣となった神殿

- 神殿はイエスにとっても、イスラエルの人々にとっても、非常に大切な礼拝の場所でした。当時のエルサレムは、ローマ国家の支配下にありました。ユダヤ人たちは、神殿内で異教国家であるローマの貨幣を使うことを避けるために、

両替えする必要がありました。また、いけにえとして捧げる動物や鳩を遠くから携えてくることは困難ですから、そうした動物を販売していました。

- ある意味では、このようなサービスは必要でしたが、一方ではこの商売で暴利を貪る商売人が現れ、神殿で荒稼ぎをするようになりました。その上、聖なる神殿を考えずに、物の運搬に便利であるとして神殿構内を通路として用いる者たちもいたようです。
- これらは、神殿が祈りの家、礼拝の場所として厳かに用いられるべき「神殿のきよさ」を踏みにじるような行為でした。神殿が「強盗の巣」と墮落してしまいました。イエスは言われました。

19:46 彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」

2) 神殿本来の機能と目的

① 神殿を愛し慕う心

- 旧約聖書の詩篇を開きますと、神殿を愛し慕う気持ちが繰り返し歌われています。

詩 23:6 まことに私のいのちの日の限りいつくしみと恵みが私を追って来られるでしょう。私はいつまでも【主】の家に住みます。

詩 27:4 一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。

詩 84:2 私のたましいは【主】の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。私の心も身も生ける神に喜びの歌を歌います。

- 神殿に対して、本来すべてのイスラエル人は、このような思いを持つべきでした。しかし、彼らにはその思いがありませんでした。そこを「強盗の巣」としていました。イエスはその神殿をご覧になられ、涙を流されました。マルコの福音書にも、その有様が記されています。

• マルコ福音書 11章

11:15 こうして彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。

11:16 また、だれにも、宮を通って物を運ぶことをお許しにならなかった。

- イエスのこのような行為に、祭司長、律法学者、そしておもだった人たちは、

イエスに殺意をいだくようになりました。

ルカ福音書 19 章

19:47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、そして民のおもだった者たちは、イエスを殺そうと狙っていたが、

② イエスに見る神の権威

- ・イエスは神の神殿がこのような悪の巣、強盗の巣となった姿を見て、商売人や両替人などを追い出されました。これはイエスの実力行使でした。悪がはびこっていることに対し、神が明確にご自身の意思を表され、判決をくだされました。
- ・それは資格がない人が行えば、暴力となります。しかし権威と権利を持つ裁判所が強制執行しても、それは暴力ではなく正当なものです。
- ・そのように、イエスは神殿に対する権利をお持ちのお方です。この権威あるイエスの前で、指導者たちはどうであったでしょうか。

19:48 何をしたらよいのか分からなかった。人々はみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。

- ・イエスが神殿をきよめられた行為は、暴力行為ではありませんでした。決して一瞬の感情の高まりからでもありませんでした。また、神殿で思わず騒動を起こしたのでもありませんでした。イエスは「強盗の巣」と墮落した神殿をきよめられたのでした。マルコ福音書 11 章には、次のように記されています。

マルコ福音書 11 章

11:11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、すでに夕方になっていたので、十二人と一緒にベタニアに出て行かれた。

- ・神殿は聖なる所、神に礼拝を捧げるべき所、そして神が臨在される宮であります。そこが汚れていたことに、イエスは権威をもって「宮きよめ」されたのでした。それは御自身が神の御子であることを現わされたことです。そして言われました。

19:46 彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」

- ・神殿は神の宮、祈りの家、聖なる所です。神にお出会いする所です。さらにイエスは、『わたしの家は祈りの家でなければならない』と言われました。すなわち神殿を、宮を、「わたしの家」と断言されました。イエスのご自身が神殿であり、神の宮であり、祈りの家と言われました。
- ・私たちは間違っても、神の宮（祈りの家）を強盗の巣としていけません。私た

ちはどのような心の姿勢で、神の宮に集まるものでしょうか。自分に尋ねてみましょう。

ま と め

主 題：「わたしの家は祈りの家です」

—イエスの心—

- ・今朝も、主は私たちにお語りくださいました。「棕櫚の日曜日」にあたり、イエスから2つのことを学びました。
 1. イエスはエルサレムを前にし、涙を流された
 2. イエスは神殿で「宮きよめ」をされた
- ・神殿は神の宮、神が臨在される所でした。イエスはそこを
「わたしの家は祈りの家でなければならない。」(19:46)
と言われました。

- ・今日、私たちは主イエスにどのように応答するでしょうか？
 - God bless you !